地区広報

はづ

No. 8
羽津地区市民センター
羽津地区社会福祉協議会
昭和58年 8 月10日

健康づくりにゲートボールを!!
第２回大会を11月13日（日）に予定

昨年度、当地区では健康づくりと地域社会づくりの一環として子供からお年寄りまでが一緒に楽しめるゲートボールの普及に努めてきました。

春風会と体育振興会の協力により、ゲートボールの講習会がもたれ、第１回大会が11月14日に実施されました。当日は老人会をはじめ体育振興会、婦人会、ＰＴＡ、スポーツ少年団など20チームが参加して盛大な大会が繰りひろげられ、熱戦の結果、羽津山老人クラブＡチームの優勝となりました。特に子供チームの活躍にはめざましいものがありました。

本年度、すでに第１回の講習会が６月12日に行なわれ(上記写真)各団体はそれぞれチームを作って熱心に受講され技術の修得につとめられました。

第２回の講習会を10月上旬に、また大会は11月13日(日)に開催の予定をしておりますので、各団体では昨年以上多数のチームの参加を期待しています。

みんなで楽しく健康づくりを!!

かした町づくり

山の思いで

羽津地区のこゝ十数年間の発展ぶりは目覚ましい。反面、どんどん少なくなる自然の緑を惜しむ声も聞かれる。先日、民俗同好会（会長・山本芳雄さん）で、垂坂山や霞ケ浦の思い出が話し合われた。紙面を借りて、こゝにその一部を紹介したい……。

或いは、一部の方々から「お年寄りの単なる郷愁に過ぎない」との批判を受けるかも知れない。たしかに時代は進み、生活様式も変わっている。しかし、この紙面から「将来の羽津・緑の町づくりはどうあるべきか?」と議論が展開することを期待したい。

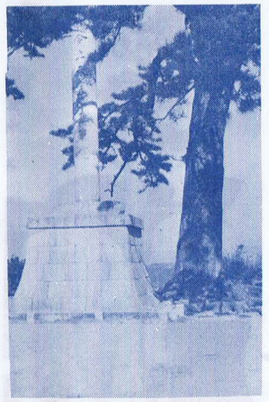
四日市じゅうの小学校が遠足に来た垂坂山

羽津病院から西は住家も殆んどなく、見渡す限り茶畑・桑畑・麦畑が続いていた。畑の境界と思われる所に、あちらこちら梅・桐などの樹が植えられていたのも印象的だ。この畑の中を一本の小径が垂坂山へと続いていた。

春になると、この小径を長い長い行列を作って、四日市じゅうの小学校が入れ替り立ち替り遠足にやって来た。当時の垂坂山は単に羽津村だけのものではなく、四日市全市民の憩いの場となっていた。

登り道も頂上近くでは急勾配となり、山頂の記念碑を過ぎると、すぐ急な下り坂が垂坂の村へと続いていた。

山頂はこの道を挟んで南と北に平らな台地が広がり、こゝが子供達の格好の遊び場となっていた。北側の台地は松林が続き、この樹蔭で思い思いの場所を陣どり、お弁当を食べた思い出も懐かしい。登り口の道ぎわにツルベ井戸があり、冷い水を水筒に補給したものだ。



垂坂山の頂上

この大きな松の木も今はなくなりました…

松の樹蔭で楽しい おべんとう

赤肌の谷で山すべり遊び

北側台地の東端に草木の生えていない谷が二つあり、ズボンのお尻を泥んこにして滑りおり、すぐまた四つ這いになって登る。あるいは、切り立った山肌に棒切れで足場を刻み、ロッククライミングまがいのスリルを楽しんだ。

写生・植物採集 自然を学ぶ子供達

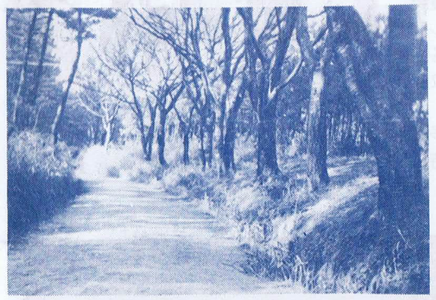
休日にも、たくさんの子供が山遊びに来た。写生・植物採集・昆虫採集など夏休みの宿題をするのに、絶好の場所であった。垂坂山からの眺望は素晴らしく、どんなへたくそな子でも、こゝでは立派な絵となった。だが、山遊びに夢中となり過ぎ、あわてて描きなぐったことも再三だ。また植物採集・昆虫採集の宝庫でもあった。谷間の茂みを歩き廻り、時間のたつのも忘れていた。

垂坂山を公園に!!

垂坂山の思い出はつきない。しかし宅地開発の波が四方より押し寄せ、どんどん山が削り取られて行く。最近、みゆきが丘へ通ずるりっぱな道路が完成し、また、羽津中学校北側でも工事が始まった。市民に親しまれた垂坂山、ぜひとも公園として、永久に残したいものだ。しかし、現在の垂坂山の荒れ方は眼に余るものがある。

垂坂山の登り口

左手にツルベ井戸がありました

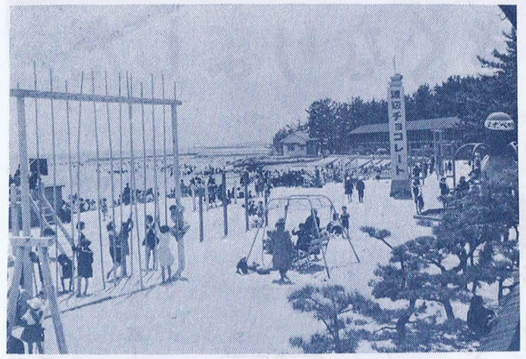


垂坂山は、いま……

緑丘バス停近くで撮りました

緑をい

海の思いで



潮干狩り・海水浴 楽しく遊びました

白砂青松と云う言葉の通り四季を通じてすばらしい霞ケ浦。紺碧の海のきらめき、松の緑。時折り白い帆かけ舟がすべるように走って行く。

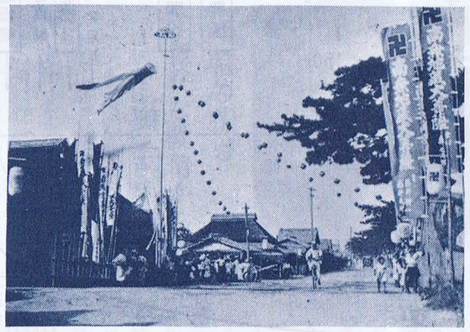
春は潮干狩りで蛤・あさりなど、いろいろの貝をとったり、海蔵川の川口で青のりをとって帰り、その日の獲物の自慢話しに花を咲かせながら夕食を楽しんだ。

夏は透き通るような海水をピチャピチャと跳ねながら遊んだり、松の樹蔭で長々と寝そべって青空を見上げたものである。

竜宮城の門 にぎわう海水浴場

霞ケ浦と云えば、東海随一を誇った海水浴場「遊楽園」を思い浮かべる。竜宮城をかたどった入口、三角屋根の大浴場、にわか芝居を見た休憩場、かき氷・西瓜・水泳用具などのお店屋さん、四日市港めぐりの遊覧船など、どれも懐かしいものばかりだ。

四日市近郊はもとより、遠く名古屋からの海水浴客で大変なにぎわいであった。顔パスで入場しては、得意顔となっていた子供の頃を思い出す今日である。



ホント？ これが金場町なの…？

昭和初期の金場地蔵盆の風景です。天下の公道を我がもの顔でお祭りを楽しんでいます。この松並木も今では、すっかり昔語りとなりました……。

春の運動会は海岸で行いました

戦前まで続いた羽津小学校の楽しい年中行事、「浜の運動会」は、今の競輪場と海蔵川の間の海岸で行われた。

この日は年に一度の学校の大移動で、大八車に運動会に必要な道具や、お湯をわかす鍋や釜などを積んで運んだ。

果しなく続く田んぼは、ちょうど、黄色い菜の花がまっさかりの季節で、この間を走る小径を、民族の大移動さながらに霞ケ浦へと行進する一団、なんと、のどかな光景であったろう。

父兄もこの日ばかりは忙しい農作業を休み、村じゅうの家が空っぽになる程たくさんの人が集まった。

太陽と潮風を身体いっぱいに浴びて走り廻った砂浜、皆でお弁当を開いた松の樹蔭。楽しい思い出となって残っている。

りっぱな緑地公園 でも、もう一工夫して欲しい!

霞埠頭・石油コンビナートの出現により、あの懐かしい緑の松林・白い砂浜の霞ケ浦海岸こそなくなったが、緑地公園として生れ変わり市民の憩いの場となっている。

公園には広い舗装道路・大小の樹木・広大な芝生、いづれも手入れがよく行き届き清楚なた、ずまい。散歩に、また家族づれの行楽には絶好の場所となっている。

ところが、プールの開かれている夏場はともかく、その他の季節には訪れる人もそれ程多くはないようだ。やはり四季折り折りに人を引きつける何か中心的なものに欠けているのではなかろうか。

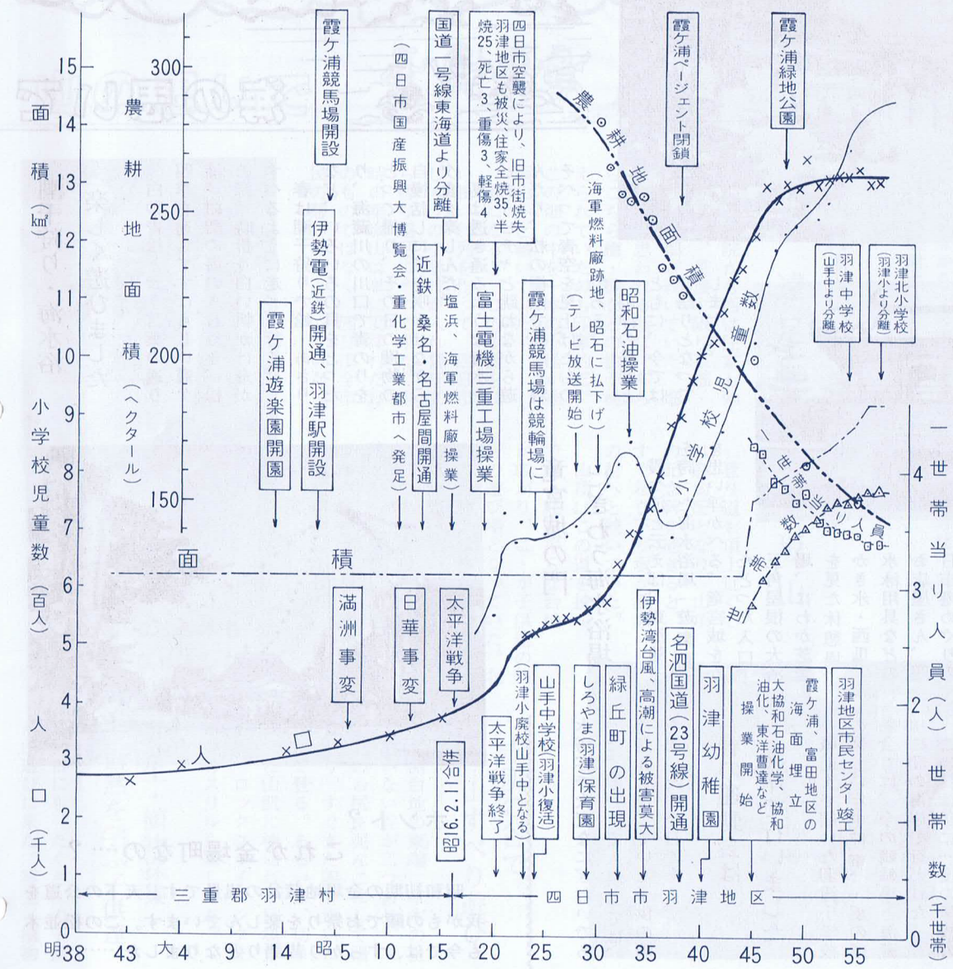
公園を作ればそれで良いと云うものでもない。せっかくの我々の財産、もっと知恵を出し合って、人の寄り集まる魅力的な公園にしたい。

霞ケ浦緑地公園の入口

羽津はこんなに大きくなりました

「羽津も、ずいぶん変ったナァ。本当に良くなったモンダ」肌で感ずるこの頃です。そこで、その移り変りをグラフにしました。題して〝眼でみる羽津近代史〟

四日市への合併・富士電機誘致が羽津発展のスタート。四日市市街の戦災による人口流入、ベビーブームの姿も読みとれます。昭石操業に併う緑ケ丘町の出現は、農耕地の宅地転用に拍車をかけ、人口急増、小・中学校の増設となりました。最近〝羽津の緑〟が口に上るのも当然でしょう。



羽津の将来について

教室から見える工場の煙突大きな建物など羽津も少しずつ景色が変わっていく様に思います。

羽津小学校をとりまく大きな松の木、桜、楓の大木や、垂坂山には、たくさん緑におおわれた木が生い茂っています。

でも、緑について真剣に考えたことはあったでしょうか。

宅地開発が進められるときに、何十年、何百年と生い茂った緑の木がおしげもなく切り倒されたり、害虫によって緑が失われていくことはさびしいことです。私達は緑をなにげなく見ていただけだったのではないでしょうか。

緑を育てる運動について十分心を注いでいたでしょうか。

これから私たちの家庭、学校、地区と身のまわりの緑化がおし進められ、自然公園や小さな植物園など作ったりして緑が増えていくといいなあと私は考えています。

もし、それが実現するならば二十一世紀に明るい見とおしが出来て、とても待ちどおしい気分でいっぱいです。

羽津小学校　六年　山中雅子

お花をたいせつに

先日、私は近くのお店へパンを買いに行きました。その時、ふとしたことに気がつきました。それは、おばさんがせっせと花を植えているのです。私が小学校一、二年のころのことです。友だちと学校の帰り道に遊び半分にちぎっては捨てていた花。その花は自然にはえているものとばかり思っていたのに、実はおばさんが植えていてくれたのです。そんなおばさんの姿を見て、私はドキッとしました。

「言葉では言えないけど、おばさん本当にありがとう。これからはきっとお花を大切にします」と心の中で誓ったのでした。

こうしたことは誰でも小さい時に経験したことがあるでしょう。小さいかわいい草花一本でも生命をもって世の中のために役立っているのです。花を愛する心は花を育ててはじめてわかるのです。土を耕し、種を播き、水をやり、肥料をやり、消毒もする行き届いた世話によってはじめて立派な花が育つものです。

羽津北小学校　六年　水谷マミ

町にひろう緑の話題

一本の記念樹に託す人生の道しるべ

近鉄阿倉川駅に程近い、ここ羽津山町の一画に、一本の桜の木がすくすくと育っています。まだ樹齢は若く、人間でいえば育ち盛りです。

しかし、春ともなれば可憐な花びらを咲かせ、道行く人びとの目を楽しませているとか……。

この桜の木は、ご主人とともに洋菓子屋を営む佐々木陽子さんが、去る五十年の成人式の時に市から贈られた記念樹です。

いまでは、小学校一年生と幼稚園に通う二児の母親になっておられますが、この木は佐々木さんの人生の道しるべであり、心の支えでもあるそうです。わが子の成長とともに、やがては大地にガッチリと根をおろし、大空に向ってたくましく伸びていくことでしょう。

成人式 記念の桜

一輪の花も豊かな愛情から

毎年五種類の花しか咲かないサツキに、今年は八種類も咲きました。十八年前にさし木した樹です。手入れと肥培がこの樹にぴったりだったのでしょうか。一輪の花を咲かせるのも、子育てと同じで、愛情をこめてその樹に接することが大切です。「ありがとう。キレイでしょう」「おまえも、もうすぐ二十歳だものな！」…これは、森準一さん（別名四丁目）が余暇を利用して、わが子のように育てられたサツキです。

作者の心境からは、あふれんばかりの愛情が汲みとれ、とてもほ、えましく思います。

いま、わたくしたちをとりまく地域社会では「文化の時代」に応えるべく、いろんな日常活動が盛んに行われております。

植物を愛し、育てる心はいまの地域社会でどれだけ尊いことでしょう。

身近にできる趣味と園芸が豊かでうるおいのある町づくりに大きく役立っております。

みごとなサツキ

松くい虫防除

とりもどそう　緑の松を
管理は最大の防御なり！

日本列島に猛威をふるっている松くい虫。その被害は、私たちの郷土にも容赦なく襲いかかり、歴史を語る老松の影はいまや消えさろうとしています。もうこれ以上枯らしてはなりません。皆さんの協力で松くい虫を一掃しようではありませんか。

◆「犯人」はザイセンチュウ。「運び屋」はマダラカミキリ。

松枯れの原因は、マツノザイセンチュウ（松の材線虫）という体長1㎜にも満たない小さな線虫です。また、その線虫を健全な松に媒介し、被害を蔓延させるのが体長3㎝程のマツノマダラカミキリという昆虫です。つまり、線虫が松枯れの犯人で、カミキリがその運び屋です。

◆防虫とその対策

マツノマダラカミキリは、衰弱した木に産卵し、翌春までその幹の中で生活します。したがって、カミキリが羽化、脱出する春先までの間に被害木を切り倒し、焼却することが最大の防除につながるわけです。

◆山林や広範な所の防除……

被害木の周辺及び健全な松にあらかじめ薬剤を散布し、マツノザイセンチュウが健全木に侵入するのを防ぐことが大切です。（スミチオン、デナポンなどの乳剤、またはスミパークEを5月下旬～6月下旬にかけて散布）

◆庭木や鉢植盆栽等……

薬剤をあらかじめ松の根から吸収させ、線虫を死滅させる方法です。根がよく張っている所に深さ5～10㎝程度の穴を掘ってここに所定量の薬剤を注入します。（ダイジストン粒剤3月頃、ネンネート粒剤4～5月頃）。なお、盆栽は網で囲っておくのも一つの防除法です。

取材をおわって

垂坂山は残った！だが…

みんなで考えよう羽津の緑を

◉「緑の町づくり」の呼びかけに応えて、たくさんの資料・写真・ご意見が寄せられた。地区住民の関心の深さをひしひしと感じさせられる。

◉いずれも懐かしく郷愁をそそる物ばかりで、しばし、思い出の世界にひたり込んだ。「垂坂山の緑を残せ！」との切実な声も当然のように思われる。

◉一日、昔の面影を求めて垂坂山に登った。山頂には人っ子一人いない。子供の頃駈け廻った林の中の小径は、生ひ茂る灌木に閉ざされ、容易に人を寄せつけてくれない。やっとの思いで、昔懐かしい眺望の場所を探し求めた。海・港・街並みの景色は素晴しかったが、松喰虫にやられた立枯木が天空に屹立しているのは、とても淋しい。

◉緑地地域指定（都市計画法）により、宅地開発の波は、喰い止められているが、とても散索を楽しめる場所ではない。改めて、緑の町づくりの難しさを痛感した。

◉「自然を温存する」だけでは緑の町づくりとは云えない。

◉生活の場と憩いの場を如何に調和させ、日常生活に溶け込ませるかが、緑の町づくりの本質であろう。

◉れっきとした私有地の垂坂山。単に「公園に!!」だけでは進展しない。皆で討論し、魅力的な活用方法を考え、行政に働きかける必要があろう。

◉四季を通じ、子供も老人も自然と集まり、楽しめる場所にしたい。

◉帰り途、麓の住宅地を散索した。どの家も庭木・草花で美しく清楚なたたずまい。こゝは既に立派な緑の町であった。

ステキな〜おとなりさん♡

◀ 大宮西町の藤井三枝子さん（左）と細谷京子さん（右）のご一家

ご紹介のお隣りさんは、藤井様のご一家です。我家が四日市市に移り住んでからのおつき合いです。もう六年にもなります。

最近テニスを始められ、まますますお元気なおじい様、お若いおばあ様、子供がお好きなご主人、奥様、そしてお二人のお子様。当地での知り合いも少ない私達にとって、いろいろと教えて戴いたり、また子供も同学年ですので、登下校も仲良くいっしょにやっています。何かわからない事や困ったことがあれば一番にお尋ねする所です。

核家族の多い現在、ご両親といっしょに生活できることは、大変幸わせで、すばらしいことだと思います。夕方になると愛犬グッピーをお伴に、おじい様とおばあ様が散歩される姿がみられます。

また私は奥さまと藤手芸をしたり、なかなか完成しないセーターを眺めたり、子供達はご主人に手品をみせて戴いたり家族全員が大好きな頼りにしているすてきなお隣りさんです。〈写真にはご両家のご主人さんと藤井さんの長男（中一）は写っていません〉

大宮西町　細谷京子

榊原孫七氏受章さる

勲五等瑞宝章

すでにご承知のことと存じますが、金場町の榊原孫七さん（七十二歳）が永年にわたる消防団活動のご功績と交通安全協会および万古産業の振興等公共の福祉増進に寄与されたご事績により、この たび、春の叙勲として勲五等瑞宝章を受章されました。

ご本人、ご一家はもとより羽津地区住民にとっても誠に名誉なことであり、心からお喜びとお祝いを申し上げます。

わたしの健康法

羽津山町
坂井俊夫さん（66歳）

私は、皆様とちょっと変わった体験を致しました。戦争で負傷し両足を切断しました。

そのため大変行動に不自由をいたしましたが、何事をなすにも正常なかた達と同じ条件で、同じ量のことをする様、自分自身の課題としてきました。

最近は、老人向のスポーツに親しむ様にしております。五・六年前まではボーリングで体の老化を防いでおりましたが、昭和五十年頃、四日市にもゲートボールが導入され、羽津山町でも老人会長の呼びかけで、はじめは十人程で始めたところ、次第にルールも解ってまいり、それにつれて本当のゲームの面白さが解ってまいりました。

若い時は別に気にもならなかったことでも、老人になると意識して体を動かすと同時に頭を使うよう心がけ、心身の老化を防ぐよう心がけています。

水鉄砲のお師匠さん

羽津保育園にて

もう すっかりおなじみになった民俗同好会のおじいちゃん、おばあちゃん。黄色い歓声に囲まれて、園児たちといっしょに楽しく水鉄砲をつくりました。

水墨画

毎日が学習の場

羽津中　教頭　坂井英隆

今年の梅雨は「からつゆ」とか、大雨が降ったかと思うと、初夏の日射しが照りつけむし暑い日が続いております。

過日、学校の方へ地区社協主催の成人教育のお知らせが廻ってきました。「心にゆとり」を持つことは、明日の仕事の糧になることを夢みて、水墨画の夜の講座に参加することを決め六月十日、初めての私の出席となりました。私より年齢の上の方、若い方、皆さん大変お上手、絵に対する興味と観察力の深さに驚きました。能力の差によってすでに上位、中位、下位の集団ができあがっているように思われました。

私は過去三十年間、中学校で理科教育を担当してきました。植物の観察図、検鏡図などはよく書いてきましたが、今ここで見るオニユリ一本のデッサンが中々書けません。全く異なったオニユリに見えるのです。今まで気づかなかった植物のとらえ方、見方観察力の不足をしみじみ感じました。お年寄りのご婦人の方から親切にして戴きました。

私達人間は、死ぬまで毎日が勉強です。新しいものを発見し、ヒントを得て自分の能力を進めて行くために行動しています。私もこの道に頑張ってやって行きます。

俳句

〈志氏ケ野句会より〉

村田　青麥　選

梅雨近し一と日の曇り菊芽さす　羽津町　大森みつゑ

軒を吹く風が輝き新茶汲む　城山町　片岡とき代

病む友の笑み戻り来て百合白し　城山町　川本　ふみ

話声高く人あり麦の秋　八田町　久志本幹子

雨の輪に水蓮の芽の紅が透け　白須賀二丁目　舘　二三子

椿咲く民家の土塀出城跡　羽津町　藤井　築城

師の居ます窓見ゆ門のねむの花　羽津町　藤井まきへ

菩提子の青きを仰ぎ梅雨の寺　羽津町　藤井まき女

砂出しの蜆に蜷も入れしまま　大宮町　武藤　弘子

草に戸を開けて漁家あり夕おぼろ　城山町　宮田　健蔵

万緑の峠を越せば海女の海　鵤町　安田　源吉

日の庭に辛夷の匂ひ師の家澄む　大宮町　山本　幸

短歌

〈羽津野短歌会より〉

小林　英選

雀鳴き車少なき日曜日
孫の授業の参観に行く　大宮町　小井　正二

まぼろしの所得減税与野党の
叫ぶ声高し選挙ま近く　大宮西町　井村左兵衛

襖ごしに姑の優しき声のして
朝寝せし我気づかひくるる　鵤町　伊藤　品子

この春の退職欄に恩師らの
名のあり吾子は新任となる　大宮町　加藤　光子

遠く住み病ひの重き叔母なれば
かく会ふことも一期とならむ　富士町　杉本　光子

親しみし友突然に転勤す
見送りてのち寡黙となりぬ　別名一丁目　長谷川槙子

老父の気にかけゐたる茶畠の
初消毒を今日果したり　川原町　平子　末春

閉ざす目に北鮮の原野浮かびきぬ
想ひ出遠きさくら草の花　羽津町　藤井まき子

二十日前に植えし蜀黍丈伸びぬ
青葉に光る朝露の玉　羽津町　前田素女子

孫が舞ひ伴吟する娘の冴えし声
見入れる我の胸の高鳴りぬ　金場町　森　房子

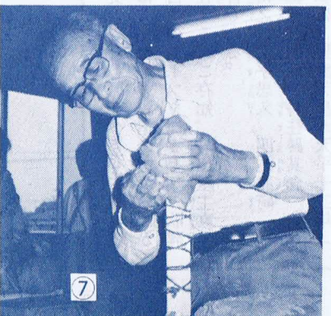
"創る喜び" 新規講座訪問

いつの時代にも一つのものを創り、完成させる喜びは人間が人間らしく生きる本当の姿ではないでしょうか。

今年度新しく発足した講座のうち、美術を代表する彫塑について、受講者の姿をレポートしました。

彫塑（チョウソ）このことばはあまりみなさんになじまれていないかも知れません。早い話しが、土と石膏の美術品です。羽津小学校の原直矢校長先生を講師に招き、現在十一名の受講者が相互にモデルになり合って、等身大の顔づくりに専念しています。受講者は高齢者から家庭の主婦まで、うまくできれば秋の市美術展に全員が出品させたいと意欲を燃やしております。

しんけんな手つきで



社協事業あれこれ

去る5月21日（土）地区社協の総会ともいうべき理事会で、本年度の事業の概要が決定されました。それ以来、現在まで（7月末）の主な行事をふりかえって、広報に紹介させていただき、今後の運営についてご理解ご協力をお願いします。

初級リーダー研修会

◆子どもの世界に食い入る青少協

初級リーダー研修会

去る六月十二日羽津小講堂で、青少協の役員が指導者になって各町子供会のリーダーのあり方について、心構えや子供集団のみちびき方、簡易ゲーム等の研修が行われました。

青少年育成者研修会

七月十日羽津小学校で「親は子に何を教えるか」と題して青少年対策室長の本田耕一先生の講演会が行われました。子を持つ親が今何を考え、子供に何をしてやらなければならないか。切実な問題に受講者は真剣そのものでした。

◆みんなでしあわせを

《第一回福祉交流会開く》

地区社会福祉協議会では、去る七月十日、市民センターにおいて第一回福祉交流会が開かれました。

福祉交流会

当交流会には体の不自由な方々や関係者約四十名が参加し、映画や四季の歌を手話で演出され、終始和やかに懇談しました。

参加することに意義を見い出す初の交流会ではありましたが、出席者の瞳には再会を約す堅い決意がみなぎっていました。

◆若さをしのぐ

高齢者教室

老人の生きがいと地域社会に果す役割というテーマで、昨年に続いて高齢者教室が開かれました。六月二十一日より毎週火曜日の午後、五回にわたって実施されました。

梅雨から向暑にかけて悪条件の中でしたが毎回熱心に受講され、現代社会に果す老人の尊い使命がみなおされ、人生の先達（先生）としての役割に深い感銘をうけました。

各講座とも全部テープにとってありますので、ご希望の方は申し出ください。

◆地区別懇談会

今年度地区社協の事業の一つとして地区別懇談会がとりあげられました。

夏休みを目前に控え、両小学校、中学校の懇談会に自治会・民生委員・育成会の方々が自主的に参加していただく協力態勢がくまれて六月末から七月中頃にかけて二十八会場にわかれて実施されました。

学校、家庭、地区が一体となって青少年の健全育成のため、真剣にとりくまなければならぬことが話しあわれました。

高齢者教室

羽津のむかし〈第二集〉

好評にお応えして増刷

羽津のむかし第二集「人生儀礼と年中行事」は、地区内外を問わず多くの方々からご好評をいただき、またたく間に底をついてしまいました。そこでこのたびみなさんのご要望にお応えするため二百部増刷いたしました。希望者は、お早めに市民センターまでお申し込み下さい。

歴史の森に歌碑は語る

歴史の森ともいうべき志氏神社境内には、北勢地方屈指の古墳のほかに、古代のルーツを探る万葉の歌碑が所在する。ご存知、丹比屋主真人歌一首である。

後爾之　人乎思久　四泥能崎
木綿取之泥而　将往跡其念

この歌は、聖武天皇が天平十二年（七四〇）藤原広嗣の乱のとき、戦禍をさけて奈良の京を出発され、一志郡の方より朝明、桑名と美濃の方に潜幸された際に、従者の丹比屋主真人が志氏神社に詣でて、妻を思い無事を祈って詠まれた歌であるとされている。

あとがき

みどりを生かしたまちづくりが各地で話題を呼んでいる折、市民憲章の趣旨を生かして、グリーンキャンペーンを特集しました。心豊かなまちづくりは、お一人おひとりの協力が何よりも大切です。

ご意見をお寄せください。

編集メンバー

◇武藤秀雄（社教推進委員）
◇天野平一（　〃　）
◇小川良二（羽津中PTA）
◇岡屋孝子（　〃　）
◇小平容子（羽津小PTA）
◇味香秀子（　〃　）
◇酒井マチ子（北小PTA）
◇木村恵子（　〃　）
◇羽津地区市民センター

羽津の人口

（昭和58年6月末現

		前回比
男	6,534 人	＋5
女	6,566 人	＋18
合　計	13,100 人	＋23
世帯数	3,896世帯	＋47